

## 都市政策・地域経済ワークショップ2 第11回 議事録

【テーマ】「私が私らしく作品を楽しむ」

【講師】藤吉祐子先生 担当教員：吉田隆之先生

【日時】2024年12月6日（金）18:30～20:20

【場所】前半：国立国際美術館

後半：大阪公立大学大学院 都市経営研究科 梅田サテライト 101教室

【参加者】都市政策・地域経済コース M1 学生

### ■ 講義概要

前半は、国立国際美術館で開催中の「コレクション1 彼女の肖像」展にて美術鑑賞アプローチの1つである「対話による鑑賞」を実際に体験しました。後半は、梅田キャンパスに移動し、「私が私らしく作品を楽しむ」をテーマに、藤吉先生が実践されている事例をご紹介いただきながら、美術館で実施されている教育プログラムについての認識を深める機会をいただきました。

### ■ 講義内容

#### 1. 講師プロフィール

2004年より国立国際美術館に勤務。各校種による美術館活動の受け入れ、教職員を対象とした美術館活用プログラム実施、鑑賞サポートツール『アクティビティ・ブック』の制作など、子どもたちと美術の出会いを模索し、スクールプログラムに注力するとともに、きこえない子どもたちも参加する0歳からの美術館体験プログラム、視覚だけに頼らずに美術館のアクティビティを楽しむユニバーサルプログラム「みる+（プラス）」など、さまざまな人たちが、それぞれの立場で、美術や美術館と接点を持ち、美術や美術館、またそこで起こることを楽しむことのできるプログラム開発と実施に努めている。

## 2. 国立国際美術館でのフィールドワーク

国立国際美術館の「コレクション1 彼女の肖像」展の中から藤吉様に2作品をピックアップしていただき、実際に対話による鑑賞を体験させていただきました。

藤吉先生からは、鑑賞にあたり、「まずは、美術館の絵画にはタイトルや解説がついていますが、まずはそれらを見ないで目の前にあるものと向き合ってください。」とのお話があり、その後、各自が気づいたこと、感じたことを対話形式で語りました。その意見に対して、藤吉先生や学生と会話を進める中で、各自が作品への感じ方を深めて行く時間を持ちました。

藤吉先生からは、「人と違う意見を楽しむ」こと、「社会課題に余韻や余白を与え、考えるきっかけを与えるのもアートの役割」といった視座に富んだお話を伺いました。

## 3. 「私が私らしく作品を楽しむ」

対話による鑑賞後は教室に戻り、藤吉先生からお話を伺いました。

—美術館や作品とのかかわり方は人それぞれ。自分らしい楽しみ方を見つけてほしい。見つけるきっかけをできるだけ多く作りたいと思い、それぞれの人が、自分らしい楽しみ方について考える場を設けている。

—大切なのは、鑑賞者がどのような学び、経験、時間にしたいかということ。例えば、時間帯やご自身の体調や気持ちのあり方によって、同じ作品でも得られる感覚は違う。そんなことも踏まえて、学びや経験、自分の時間を作っていけたら良い。

—映画や小説などは、自分の感覚をととても大事にしながら作品と向き合う。作品や作者のことを理解しようというよりは、まずは自分の感覚を大事にして、作品を受け取

ることが多い。一方、美術作品になると、作品と向き合う前に、作品の背景や作者のコンセプトなどを理解しようとしがち。作者への敬意は大切だが、尊重しすぎて見すぎず、自分がその作品をどのように見るか、その作品を通して何を考えるかも大切にしてほしい。

—多くの方は、キャプションで作品名や作者、解説などを確認して、それありきで楽しみ方を考えてしまう、美術作品だからということで、解説を読んで、自分が受け取ったものを解説に書かれた内容に整えようとしてしまう、もしくは、解説を読んで納得して終わってしまう方が多いと思う。

—1度そこから解放されて、目の前にある作品と向き合い、自分なりにどうやって面白がるのかなっていうことを考えていけると、作品との出会いが広がる。

—見る(客観)、感じる(主観)、知る、深めるのどこを大切にするか、重きをおくかで、美術館や作品との関わり方も変わる

#### (1)団体プログラムについて

—スクールプログラムとして小中高校、特別支援学校等を受け入れている。子どもたちの発達段階や興味関心、学校として希望されることなどを伺いながら、子どもたちの「らしさ」を引き出すために、先生と話し合いながら目標(ねらい)を定めていく。

#### ①オリエンテーション

—鑑賞前のオリエンテーションは事前準備として非常に重要な時間。最初に展覧会や作品の楽しみ方をお伝えしたり、作品とより関わりを持てるようなこととお話ししな

がら、子どもたちが、展覧会場に行った時に主体的な目を持って鑑賞できるようにする。子どもたちは、大人よりも作品を分け隔てなく見ることができるが、まず、美術館に行ったことがないということが大きい。「とっかかり」や「きっかけ」というものをなるべく作って、作品と接続しやすいような状態で展示室に行ってもらうのが非常に大事。低学年なのか高学年なのかによっても作品へのアプローチは変わってくるので、必要なアプローチを見据えて事前のオリエンテーションを行っている。

## ②ギャラリー・トーク(対話による鑑賞)

—子どもたちの気づき、考えを紡ぎながら作品鑑賞する。子どもたちが自分なりに感じ取れる状態をつくっていく。

—中高生くらいになってくると、その背景や情報に対する関心が強まる年齢になる。作品にもよるが、最初はそういうところから離れて、まずは向き合ってみましょうと。鑑賞という言葉を使うと元々自分たちが関わりたくて美術館に来てきかない場合は、大人によって価値づけられたものとして、作品との間に距離を置いてしまいがちだ。「鑑賞」ではなく「観察」していく中で、自分が気になるところを見つけ、興味がある人は情報を注入しながら、作品を深めてもらう。

## ③鑑賞サポートツール「アクティビティ・ブック」

—子どもたちの鑑賞への抵抗感をできるだけ軽減し、少しでも作品と向き合うきっかけとしてもらうために制作。ゲーム感覚で、少しでも作品の前に長く立ち、作品との距離を縮めるためのツール。

—作品の見方は人それぞれ。さらっと観ることも時間をかけて観ることもできる。作

品を観る楽しさとか、作品を自分らしく味わう楽しさを知るためには、それなりに作品と向き合う時間が必要であることも事実。強烈な印象を残す作品と出会えば、作品への興味は高まるが、大方の場合、そこまで強烈な作品には出会えないことも多い。同じ作品でも5分で観るのと30分で観るのでは見えてくるところが全く違う。長く見ていると、その中で、徐々に細部にまで目を向けることになり、自分の気持ちの揺れや動きが必ず出る。時間をかけて見ていると、何かが違う、違って見えてきた、案外楽しいじゃないかなどと、子どもたちにも思ってもらえるきっかけを作りたい。

—子ども達の中にも、とても早く観る子もいれば、自分の気に入ったものを1点だけじっと観て佇んでいる子もいる。じっと観ている子は、その時点で、既にその子「らしい」作品との関わり方が生まれている。

—スケッチは、気になるものを見つけてスケッチしていく中で、作品をよく見ることにつながる。描けないところはよく見ていないので、描こうとすると、よく見ることになる。そして、そのうち、その作品が気になった理由について知らず知らずのうちに気づいたり、最初と描き終わった後での印象が変わったりする。これも、少しでも長い時間、作品と向きあってもらうきっかけになる。

#### ④先生のためのプログラム

—先生が子どもたちと美術作品の関わり方を考えるための研修会。子どもたちが美術作品と関わる時にどういうことが生まれるのか、どのような気持ちの移り変わりがあるのかを先生自身に体験してもらう。

—作品鑑賞をすることが子どもたちにもたらす影響などを、研究員からのレクチャー

やディスカッションを通じて知ってもらう。子どもたちの鑑賞方法を考える会だが、先生自身が、ご自身と作品や美術館との関わり方を考える会でもある。

## (2)個人向けプログラムについて

—個人向けプログラムも対象に合わせた形で開発をしている。例えば、美術館は視覚優位な場所ではあるが、見えない人や、もっと感覚的なことを大事にしながら作品を見たいと思う人たちを対象として、視覚以外の感覚器官も働かせて美術作品を楽しむようなプログラムも実施している。

—それぞれの人が目の前にある作品を自分なりに受け止め、バックグラウンドの違う人たちが集まり、作品について話をしたり、感じたりして行くことが求められることも多くなってきた。コミュニケーションをより重視したプログラムの開発もしている。

—学芸員のトーク、専門家やアーティストによるレクチャー、上映会、対話による鑑賞会、視覚以外の感覚も使うプログラムなど、作品や美術へのアプローチは1つでは無く、様々な経験をしていくと、ご自身と作品を繋ぐものは、人それぞれこういう方法がいいなということが少しずつ見えてくる。それを知っていただくためにも、色々な幅や種類の鑑賞機会を設けることを意識して構成している。

—特別支援学校での活動では、見えない、美術という世界を知らない子どもたちに、レプリカなどの活用を通して、まずは美術作品の存在に触れらうことから、次の展開につながるきっかけづくりを行っている。未就学の子どもと保護者向けの活動では、絵本を読んだり、会話を楽しんだり、作品を見たり、色々な関り方をすることで、子

どもたちや保護者が美術館や作品の楽しみ方を考えるきっかけとなる体験を作り出している。聞こえない子どもたちを主な対象者として実施しているプログラムでは、美術館だからこその手話（ことば）との出会いを重視したプログラムを考えている。

—自分らしい美術の楽しみ方を見つけてもらえたらと思う。作品を解釈する上で答えは1つではないし、楽しみ方も1つではないので、皆さんの楽しみ方で、美術作品を楽しんでもらいたい。

—現代美術作品というのは、否定的に、何故こんな作品を作ったのか、そもそも、これがアートなのかと受け取られてしまうことも多いが、現代美術は、私たちが生きている社会や世界のことを扱っている作品が多いので、ニュースや決まったメッセージとは違った形で、そういう問題に触れられるチャンスと思って楽しんでいただけたらと思う。

以上

(議事録作成：都市政策・地域経済コース 修士課程1年 野村仁志)